



PRO-LIFE NEWS

(中絶に反対する運動)

〒780 高知市新本町一丁目七番三十一号

障害児を持つ喜び

五年前、レスリーとデイビッドは、自分達の息子のナサンが小頭症の重度の障害を負っていることを発見しました。彼の脳の大きさは、正常な状態より小さかったのです。実際、彼の脳は小さすぎて、肺炎になった時、自分の小さな体を維持することができませんでした。彼は一才と少しで亡くなりました。その後すぐ、その夫婦にまた子どもができました。今二才半になるナタリーも同じ障害を持っています。

「私達は、自分達が運命の犠牲者だとは思っていません。私達は親であることを実感しているのです。」と、デイビッドとレスリーは語っています。以下は、彼らが障害児を養育することのあまり知られていない面、つまりその喜びについて語ったことです。

二人は、いつくしみと誇りを持ってナサンのことを思い出すのです。私達は、「この子は何の価値もありません。彼は何もすることができないでしょう。彼はどこへ行くこともできないでしょう。」と言われました。しかし、数日間ナサンと過ごした後で、誰が何と言おうとも、この子のために私達がすべきことがたくさんあることがわかりました。

ナサンは人間ではなかった、彼は「植物」にすぎなかった、と言うことは話もできないと思います。危篤状態にあつてさえも、彼の心臓の心拍数は、私達が話しかけると、正常な状態に復帰しかけたからでした。

ナサンが亡くなった時、私達はまた子どもが欲しいと思いました。次の子どもも障害を持って生まれてくる可能性が少しはあることを知っていました。でも私達は、喜んでその危険を受け入れました。というのは、ナサンとの経験がひどいものであったと私達が思わなかったからです。正常な妊娠でしたが、ナタリーを見るなり、彼女も小頭症であることがわかりました。

ナタリーの脳は、ナサンのよりわずかに大きいのですが、彼女は歩くことも這うこともできません。彼女は助けがなければ、座ることも、抱きつくこともできません。ナタリーが学校へ行くことは決してないでしょう。でも、そのことは私達にとってどうでもいいことです。大切にしたいことなのです。大切なことは彼女が何ができるかなのです。ナタリーはいろいろな方法で私達に彼

女の思いを伝えます。彼女は目で私達に訴えてきます。私達は彼女がだっこされたがっているのが分かるのです。

ナタリーの人生の表面だけを見れば、もしかすれば、「全く何も」見えないかも知れません。でももう少し奥まで見れば、人々がお互いに愛し合い、絆を深めあい、さりげなく助け合っている姿が見えるでしょう。彼女は一言も発すること無く、そうさせることができるのです。

ナタリーもナサンも、私達に生きる目的を与えてくれました。私達の人生は豊かになりましたし、また他の人々の人生も豊かなものになっています。私達は文字どおり世界中に友人がいて、手紙や電話でナタリーの事を尋ねてくれます。

私達人間は、人生は、いつも健康で、幸福で、裕福で、心ときめいていられて

看護婦発言する！

こそ価値があると考えがちです。しかし、人生はそのようであることはなく、私達はみんな苦しんでいるのです。障害児の方が、「正常な」人より苦しみが多いとどうして言うことができるでしょうか。

もしあなたが障害のある子どもを妊娠していて、中絶をしようとしているなら、あなたは自分が失おうとしているものが分かっていないのです。障害児を持つことがどんなに大変であるかを語ることは誰にでもできますが、障害のある赤ちゃんを持つことがどんなに素晴らしいかを語ることは話もできません。その子とのあなたの関わりが大切なことになるのです。障害は大して重要でないことになるのです。

さらに、生死を決定するのは私達の役目ではありません。ひとつには、私達は誰一人として、これから

先に何が起こるか知ることができないのです。あなたが逆境に遭遇した時には、神様があなたを強くさせるものをあなたのために準備しておられるのでしよう。あなたには、そのまた胎内にいる子どもに、あなたの特別な理解と愛を与える機会を与えられているのです。そして、もしあなたが今「ノー」と言えば、あなたはそれがどのくらい深い愛情かが決して分からないでしょう。

障害児を持つことが、マインナスでひどいことであると思わないで下さい。あなたの人生が都合の良いものでなければならぬと思わないで下さい。私達だけに生まれてきているのではないことを、思い起こさなければなりません。私達は他の者を助けるために生まれてきたのです。しかし、私達の文化は便利

さ指向の文化であり、そのことが問題なのです。ナサンとナタリーは私達に、家族の愛という朽ちることのない価値あるもの、逆境に立ち向かう勇氣、そして幼子の人生の中に見る言葉では語ることでできない喜びを教えてくださいました。

私達は、障害児の親となった事を光栄に思いますが、そして私達はあなた方に私達のような人が他にたくさんいることを知ってほしいと思います。

メアリー・セイツ

私は正看護婦です。私が自分の話をしようと決心したのは、カナダ人、特に女性は中絶の実際に意味することを知る権利があると私が信じたからです。

15年以上も前のこと、私はウィニペグ健康科学センター（Winnipeg Health Sciences Center）の婦人科医病棟のスタッフに参加することになっていました。このことが中絶の手伝いを伴うことを私は知っていました。その当時私は自分自身がフェミニストであると思っていて、問題を抱えた女の子たちがその解決法として中絶を受けるとは当然であると考えていました。訓練された専門家として、中絶がどういうものであるのかを知っているという自信が

ありました。しかし人間を殺しているとは一度も思いませんでした。

最初の一年ほど、私はこの新しい仕事を楽しんでいました。私は吸引中絶（妊娠12週から13週に行われる）には携わっていませんでした。患者のカルテには「妊娠の産物」ということは書いてあり、もちろん私にはこれが胎児と胎盤であることはわかっていました。でも私は一度もこれがどういうことであるのか考えて見ようとはしませんでした。

妊娠13週を過ぎた中絶の手伝いはしていましたが、5、6週間に一度ぐらいしかありませんでした。当然4ヶ月目に入ると赤ん坊は大きすぎて吸引チューブを通りません。そこで医者陣痛を起こさ

せるのです。私は自分が困っている女の子たちの助けになっているのだと本当に信じていました。また、それが彼女たちに対して私たちが与えられる最善の助けであるかどうかについては一度も考えて見ませんでした。中絶は経済的や社会的理由から行われることがほとんどでした。女の子たちが大学を最後まで行きたかったり、まだ結婚していないために問題が起こるのを避けたかったりするために。レイプのために行われた中絶は一つも思い出せません。

入れるのも看護婦であり、それを検査のために病理学部に送り出しました。事前の説明では、陣痛と分娩がどれほど苦痛であるかについては患者には伝えられません。ただ「あなたはこれから注射を受けます。そしてしばらくするとあなたは流産します」としか言われませんでした。妊娠4ヶ月目に入ると赤ん坊がどのくらい大きくなっているか、またその赤ん坊がどのような姿をしているかなどは母親には知らせたことはありません。

入ります。そのような場面に直面した一人の医者のごとを私は憶えています。彼は15歳の患者の子どもを墮ろしました。妊娠16週目に近い赤ん坊が生まれてきました。その医者はそれを診て顔面蒼白になりました。「信じられない」彼は言いました。「こんなものだとは知らなかった」。その後、彼が妊娠4ヶ月目に入った中絶を手がけたのを私は知りません。

今でも私を悩ます一つの事件があります。母親は20代半ばで、すでに二人の子どもをもっており、もう一人を育てる余裕はないと感じていました。彼女のカルテには妊娠4ヶ月であると記されていますが、一目見れば妊娠しているのが分かる位でしたから、私たち看護婦は、彼女が自分で言っているよりもかなり妊娠週が進んでいるであろうと思っていました。

医者が中絶をしに現れたとき、私たちのうち誰も彼の手伝いをしたが、3人の新人看護婦が手伝う事を承知し、医者は陣痛を始めさせる注射をしました。

2時間半後、その母親は痛ましく泣いている男の子の赤ん坊を出産しました。その赤ん坊はプラスチック容器にはとても入れられないくらいのお大きさをした。男の子は少なくとも22週、あるいは24週くらいに見えました。

手伝った看護婦はともも動転していません。実際、スタッフ全員が泣いていました。看護婦たちが担当した医者に連絡を取りましたが、彼は「放っておきなさい、どうせ彼は死ぬんだ。母親がそう望んでいるのだから」と言いました。

次に看護婦たちは夜間の責任者を呼びました。その責任者は大急ぎで小さな男の子を集中管理育児室に連れていきました。集中管理の人達は赤ん坊を救うために何もしてやれないと言いました。「あなた達、赤ん坊を殺したいんです。それはあなた達の問題です。どうして我々がこの子の泣いているのを聞いていなければならぬ、愛しながら連れ歩きませぬ。彼女は泣いていました。赤ん坊は2時間ほど経ってから彼女の腕の中で死んで行きました。

その事件があつてしばらく経ってから私は新卒の人と一緒に生命の成長についての映画を見に行きました。その映画は、研究者達が妊娠8週から12週目の子宮の内部を直接撮影することを可能にした新しい技術によって作

られていたすばらしいものでした。

私の中で何ヶ月もの間大きくなりつつあった感情がその映画によって具体化されました。もうこの仕事を続けていけないことを悟りました。私は責任者に辞めることを告げました。

しかし、看護婦たちが単に中絶反対者になったところで、全体を止めさせるには十分でないのです。中絶は行われ続けていて、事実その数はおびただしく増加しているのです。現在カナダで毎年九万四千件以上の増加です！看護婦たちが堂々と自分の意見を述べ、真実を語り続けていけばこんな数にはならなかったはずですよ。

単に自分の職を失うのが恐いわけではありません。もちろんそれも理由の一つではありますが、主な原因は私たち看護婦に課せられる基本条件なので

す。それは私たちの仕事における全てのことと完全に秘密であるということとです。まず第一に患者が混乱しないように。そしていつでも医師が正しいという前提のためにたとえそれが間違っているとしても）！

このような態度が中絶に関する真実を隠すことになっていくのです。私たちは赤ん坊を殺しているのです。多くの看護婦（そして医者も）、実際にそれに関わっていない限り実感しないのです。無感覚になれる人たちだけが、関わり続けることができるのかもしれない。

看護婦たちが声を大にして発言し始めることが絶対に必要なのです。

Pro-Life News, 1993年

6月カナダ

『人間の生命が始まるとき』

ある集団の人達が次の

ような質問をされたとします：太陽が地球の周りを回っているのでしょうか、それとも地球が太陽の周りを回っているのでしょうか？その人達の教育レベルによってこの問いに対する返答が変わってくるでしょう。場合によってはどちらも違うと言い出すかも知れません。

このような意見の相違は何を意味しているのでしょうか？誰も本当の答えを知らないということなのでしょう。それとも科学者達の間でも意見の食い違いがあり、正しい答えを特定するのが不可能だということでしょうか？もちろん違います。その集団の一部がただ正しい答えを知らないだけなのです。

現在のところ、多くの人達が「我々は、いつ人間の生命が始まるかについて、しっかりとした意見の一致を得られていません」と言っています。人間の生命がいつ始まるのかを誰も知らないのでしょうか？科学者達も人間の生命がいつ始まるのかを特定できずにいるのでしょうか？つまりこの問いに対しては正しい答えも間違った答えもないということなのでしょう

「地球が太陽の周りを回っている」と物理学の教科書に書いてあるように、科学関連の本にも人間の生命がいつ始まるかについて書いてあります。医療胎生学（生物学の一分野で、胎児とその成長を扱う）の色々な教科書に載っ

ている、いつ人間の生命が始まるかについて述べている文章をいくつかあげてみましょう。「新しい人間は接合子から始まる。」「受精の瞬間に新しい人間の存在が確立される。さらに、その人間の人格までも確立されるのである。」「人間の成長は、女性の卵子と男性の精子が受精（受胎）した瞬間から始まる。」「新しい人間の生産は、精子と卵子が結合し、一つの細胞を形成したときから始まる。一つの微視的な細胞が複雑な人間へと変身して行くのである。」「特別高度な役割を持った二種類の細胞である男性の精子と女性の卵子が結合し、接合子という新しい有機体を形成する。この行程が受精である。人間の成長はこの受精

から始まるのである。」

これらは反中絶をうたう文献から集められたものではありません。これらは世界中で使用されている科学の教科書から引用してきたものです。これらの教科書には、人間の生命が始まる時として、受精の瞬間以外を書いているものは一つもありません。それは出産してからだとか、妊娠八週目からだとか、胎児に生育力がついてからだとか、七ヶ月目に入ってからだとか、排卵の時からだ、などとは書いていないのです。どの教科書も一つとして人間の生命が始まるのがいつなのかかわからないとか、そのことについて議論されたとか、その時期があやふやであるとは書いてありません。

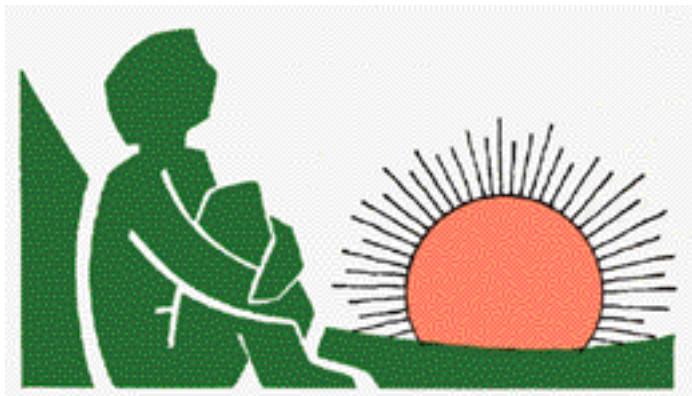
これらの教科書の出版年は一九一九年から一九九四年にわたっています。これは、「このことが新しい発見でないことを示して

おり、それと同時に少なくとも七十五年間変わっていないということも示しています。これらの教科書は、人間の生命がいつ始まるかについて、専門家の意見が一致していることを示しています。専門家は人間の生命は受精の瞬間に結合子が形成されることによって始まるという一致した意見を持っています。

人間の生命がいつ始まるかということに対しては色々な意見があるように見られますが、事実は一つだけなのです。人々の間で意見の不一致が見られるのは、科学者達がそれを特定できずにいるためではなく、一部の人々が誤った考えを持っているからなのです。

Presbyterians

pro-life news95



安楽死

最新情報

オランダ

ハーグにある地方裁判所で10月24日、ある医者が昏睡状態の患者を殺したことに對して有罪判決が下された。しかもその医者は3ヶ月しか執行猶予期間が与えられなかった。この医者は安楽死規定に従うことができていなかったのである。すなわち、患者に死にたいかどうかを確認せず、患者が耐えがたい痛みに見舞われていたわけでもなく、患者に他の医者の診察を受けさせていなかったのである。しかしながら、裁判所はその医者がよく反省していると判断し、検察側もその後より軽い刑を承認している。

11月7日、アムステルダムにある控訴裁判所では、ある医者が耐えがたい痛みに見舞われていたとされる障害を持った新生児を殺害した罪で告発されていた件で、裁判所はその告発を棄却した。裁判所は「この医者の行動は、しっかりとした科学的、医学的判断に基づいており、道徳的規範にも則っていた」と言っている。11月13日にはこれと似たような裁定がオランダ地方裁判所でも下されている。報道によると、この二件が国の最高裁判所で争われることになり、政府検察局は控訴し続けるということである。これは、自己の意志を示すことのできない人間を殺すことに関して、最高裁判所の裁定を得ることを目的としている。

新しいガイドライン...
これらの判決は、王立オランダ医療協会 (Royal Dutch Medical Association)

が8月25日に公表したガイドラインを規範にするものである。既存のガイドラインに追加されているガイドラインのうち、最新のものは、医者が患者に致死量の薬を投与するのではなく、可能なならば患者自身が薬を服用する」という内容である。これは、安楽死を施行する医者たちの良心の呵責を和らげるために考えられたものである。多くの医者が、安楽死の施行に伴う精神的なストレスについて抗議している。

また、別のガイドラインでは、良心的な問題から安楽死に反対している医者は、死にたがっている患者に、安楽死を行ってくれる他の医者を紹介しなくてはならないことになっている。これは、国内で医療活動を続けている約六百人の生命擁護家の医者たちの反対を受けても、どこでも安楽死を受けられる

ことを保証するためのガイドラインである。相互の影響・これら

ガイドラインにはまだ法的効力がないため、裁判所には、医療倫理の現状に対する確かな反応」として受け入れられることになりそうである。同時に、生命擁護家の医師たちの反論の言葉は、裁判所によって、医療界での安楽死の推進の妨害を排除するために使われることになるだろう。

アイルランド

脳に障害のある女性がアイルランドの最高裁判所の命令によって食事と水を取り上げられ、9月21日に脱水症状によって死亡した。20年以上上面倒を見てもらっていた病院から移されてちょうど10日後のことである。アイルランドの最高裁判所は7月27

日に判決を下し、その女性は今までいたその病院から、彼女を殺すことを望んでいるスタッフのいる他の施設へ移されたのである。

ニュージーランド

ニュージーランドの自発的安楽死協会(A Voluntary Euthanasia Society)は、安楽死に関する国民投票の推進を許可された。このような国民投票は、議会によって試験的に認可されたもので、「自発的な安楽死は80才以上の者に対して合法化される」という条件がつけられている。これによって、協会は有権者から二十五万人の署名を集めなくてはならない。国民投票の結果によって議事が拘束されることにはならない。また、最新の情報によると、8月16日には安楽死を推進する法案を

却下するための評決が議会できとられることになっている。

ベルギー

ベルギーの厚生大臣マーセル・コラ氏は、安楽死を厳しい条件付きで認可するよう要求した。コラ氏は11月13日にベルギーラジオでこのことについて発言した。その中で、コラ氏自身、6年前に自分の母親を殺してもらうように医者に頼んだことを明らかにした。彼の母親はひどい痛みに見舞われていたと彼は主張していた。彼はさらに付け加え、医者が彼の要望を聞き入れたかどうかはわからないが、その2日後に彼の母親は死んだと言った。彼は、もし同じような状況に陥ったらまた同じことをするであろうと述べていた。

オーストラリア

11月22日、オーストラリアの首都州(キャンベラ)の下院議会は、安楽死を合法化する議案を却下した。安楽死に賛成の方針を取っているオーストラリア労働党の党員二人が党の方針に逆らい、議案に反対の立場をとったため、このような結果になった。これに続き、サウスオーストラリア州の州議会でも7月27日に安楽死法案却下の評決が下された。一方、ノーザンテリトリー州では5月25日に安楽死法が可決されている。しかし、政府は可決されたその法律が現状のままでは非常に欠陥が多く、とても協行できる状態でないことを認めており、その欠陥を無くし、法律が施行できるように、改正法案が提出されることになっている。

8月

Pro Life Hero

今月のプロ・ライフ・

ヒーローの山田末熊さんは茨城県取手市にお住まいです。毎月、100部プロ・ライフ・ニュースを購入して下さり、今年85才になられたとのことですが、私達のニュースを配り続けてくれています。最初、警察署にかけ、取手駅前でニュースを配る許可を頂き、電車から降りられる見知らぬ人に声を掛けて、一人一人にニュースを手渡して下さっています。

山田さんは12人の兄弟姉妹のうちの6番目だそうですね。熊市おじいさんは子どもはこれで終わりというので、末熊さんと名付けられたそうですが、その後も次々と生まれて12名になりましたとおっしゃっていました。

子どもの頃は、長崎のマ

リア会が経営する海星中学校に通ったものの、仏教徒であった山田さん。公教要理の勉強は許してくれただお父さんにも洗礼の許しはもらえず、長い間カトリックの事は忘れてしまっていましたがお恵で家族四人洗礼を受けることができ、洗礼者ヨハネの霊名を頂きました。

胎児がかわいそうという経験をしたのと、お恵への恩返しのお気持ちでこのプロ・ライフ運動をして下さっているそうです。

胎児はかわいそうという経験は、三菱工場の九州の炭鉱の資材課に勤めていた頃、病院の事務長の欠員で事務の方にまわされ、その病院の倉庫でアルコール漬けにされた中絶された赤ちゃんをみて、(背丈は小指くらいで、指も男性器ももうすであつた)かわいそうなことをすると思つたと言われ

ます。

お恵と感ずるのは、弟さんの奥さんが体が弱く、三番目のお子さんを中絶しようかと弟さんに相談された時、即座に、中絶することを禁じ、母親が死んでもお産を実行することを勧められました。義妹は無事男の子を出産し、その後も次々男の子を二人出産されたそうです。

お恵を感謝しているのですとお手紙は結ばれていました。

(大岡滋子)

お知らせ・・・

ビルングス御夫妻研究

平和の巡礼者として世界を旅される現在のローマ法皇は、昨年、回勅「生命の福音」を配布されました。これは、命の文化に対して、死の文化が横行する恐るべき現代の危機から、人類を救いたためでした。この回勅は宗教を越え世界の多くの善意の人達から歓迎されています。

そこで世界の学者で構成されているヴァチカンの「生命学士院」は、会議を開きました。会議で一致したことは、生命の尊厳と、その命の誕生の鍵を握る自然な家族計画「ビルングス・メソッド」の普及が急務であるということでした。この「ビルングス・メソッド」は排卵時に分泌される頸管粘液を家族計画に応用したもので、100

%に近い高い成功率を得ており、世界的に有名な最新の医学雑誌にも幾度か掲載され、自然な家族計画の方法として、高い評価を得ているものです。

「ビルングス・メソッド」の開発者であるビルングズ医学博士夫妻は今日まで世界100カ国程から招かれ、「ビルングス・メソッド」の普及に奉仕して来られました。日本には七年前の一九八七年に初来日されました。その時、NHKは夫人とのインタビューを朝のワイドニュースで流し、各新聞社は記事に載せ、反響を呼びました。また、セミナー参加者は「ビルングス・メソッド」に驚き、この素晴らしい自然の仕組みを知ってよかつたと喜びました。以来、多くの方達の協力が有り、静かですが確実に普及してきましました。

ご夫妻は夫婦としても親(実子6人、養子3人)

としても、魅力あふれる誠
実で謙虚な方でもいらっ
しゃいます。この自然の恵
「ビリングス・メソッド」に
は男女の別なくどなたで
も参加できます。むしろ一
人でも多くの方が参加さ
れて、「ビリングス排卵法」
の素晴らしさをより正しく
理解される機会となり、こ
れを生かされて、さらに回
りの人にも伝えていただ
けるなら、どんなにか明る
い未来が展開されること
でしょう。

参加を希望される方、会
場などのお問い合わせは
次のファミリーセンター
宛にお願い致します。

主催：

「明るい家庭を築く会」
(ファミリーセンター)

〒815 福岡市南区田山

4-14-27

TEL・・092-541-6207

FAX・・092-552-5022